

20. 経皮内視鏡的胃瘻造設術の皮膚感染症に対する over tube type PEG kit の効果

大隅悦子, 今井尚志 (国療千葉東)

近年, 神経難病患者における胃瘻のニーズは増大している。当院でも平成13年に17例, 平成14年に24例の患者が新たに胃瘻を造設した。合併症はほとんどが皮下膿瘍に代表される術後皮膚感染症であった。経皮内視鏡的胃瘻造設術 (PEG) を, 従来の Ponsky type から over tube type に変更したところ, 皮膚感染症合併率は76%から21%に低下し, 重篤な皮下膿瘍の発生は見られなくなった。

21. 当院における回復期リハ病棟の活動状況について

旭 俊臣, 篠遠 仁, 畠山治子
芳山充晴 (旭神経内科)

回復期リハ病棟は, 脳血管障害や骨折発症後3ヶ月以内の患者に対して, リハビリ訓練を集中的に行うための病棟である。平成14年9月に病棟を開設し11月までに55名の患者が退院した。退院患者の平均在院日数は75日で, 在宅復帰率は64%。バーサルインデックスでは入院時と退院時で13点改善した。改善して在宅復帰率が上昇した理由は, 早期訓練, 訓練時間の増加, 及びリハチームの連携によるものと考えられる。

22. 本態性パーキンソン病患者の QOL 阻害因子に関する検討

北野邦孝, 師尾 郁, 根本芳枝
西村知香 (松戸神経内科)

本態性パーキンソン病患者の生活状況, QOL を阻害している因子, 介護保険利用状況, リハビリテーションに対する要望などについて聞き取り調査を行った (症例113例, 男46例, 女68例, 2002年3月1日~4月30日)。早期に障害されるQOLとして「趣味の継続」, 「就労・社会との交流」などが目立った。介護保険の利用率は29%で予想よりも低い値であった。リハビリテーションへの欲求については多彩であり, 単に“機能訓練”ということではなく“人間らしい生活”への希望が強く, また在宅リハビリテーションの展開が望まれる結果であった。

23. アトピー性皮膚炎における頸椎椎間板変性

伊藤彰一 (千大院)

アトピー性皮膚炎 (AD) 連続例を対象に神経学的診察, 頸椎 MRI を施行し, 疾患対照 (多発性硬化症:

MS), 健常対照 (NC) と比較検討した。AD で腱反射異常が60%、感覚低下が34%, 筋力低下が23%と高率であった。AD の頸椎 MRI で椎間板変性が86%に認められ, 対照群 (MS 50%, NC 50%) よりも有意に高率だった。AD における椎間板変性と血清全 IgE 値には正の相関傾向が認められた。

24. 進行性核上性麻痺における中脳吻側部の萎縮の研究

加藤直子 (千大院)

進行性核上性麻痺の中脳吻側部の萎縮を MRI 及び剖検脳で検討した。中脳被蓋は全体に萎縮し, 脚間窩の幅の被蓋前後径に対する相対的延長を認めた。萎縮部位には垂直性眼球運動中枢が含まれ病理学的に tau 関連病変と神経細胞数の減少を認めた。

25. 運動ニューロン変性・再性に伴う軸索イオンチャネル発現の変化

金井数明 (千大院)

慢性の運動ニューロン変性・再生下では有痛性筋痙攣や線維束性収縮などの運動単位の自発発射による症状が高頻度に認められ, 軸索の興奮性が増大していることが推定される。今回各種の下位運動ニューロン変性を伴う疾患における筋痙攣の臨床的分析と軸索興奮性の神経生理学的評価を行い, 軸索興奮性増大の病態生理について検討した。また一部疾患では推定される病態生理に基づく治療を試みた。

〔特別講演〕

26. 痴呆性疾患におけるコリン作動性神経系の病態 -PET による脳内 AChE 活性のインビボ解析-

青墳章代 (千大)

脳内コリン神経系は学習や記憶などの認知機能に深く関与していると考えられている。PET による脳内 AChE 活性の測定の結果, アルツハイマー病 (AD) では頭頂葉・側頭葉皮質で低下しており, 早発型が晩発型よりも高度の低下がみられた。塩酸ドネペジル 5 mg の投与により AChE 活性は37%阻害された。Lewy 小体型痴呆では AD よりも更に高度の低下を示し, 一方前頭側頭葉痴呆ではコリン系は比較的保たれる特徴がみられた。痴呆性疾患におけるコリン神経系の病態の解明は治療との関連においても重要である。